

# 北國新聞社自転車大競走

1906（明治39）年に開催された「北國新聞社自転車大競走」が29日、時を超えて現代によみがえった。七尾く賀間の公道を舞台にした117年前のデッドヒートは、当地にロードレースの種をまき、後年に「ツール・ド・の」として花開く。創刊130年記念として往時を再現した「デモ走行」に随行し、本紙が「大壮拳」と胸を張った未曾有のレースを追体験した先に、当時の熱気と、明治から変わらぬ地元紙の志が浮かび上がってきた。

（編集委員・竹森和生）  
【3面に日曜特番】

午前6時50分、県自転車競技連盟のメンバー15人が尾山神社を出発した。明治のレースにならぬ、目指すは能登、加賀の各ゴールだ。一行は肅々とスタートしたが、明治のレースは初っぱなから尋常ではない。当時の記事は「数万」の観客が殺到したと伝える。

しかし、なぜコースを東と西の2部隊に分けたのだろう。警備費などのコストが倍増しそうなものだが、考えようによっては、フィニッシュ地点が2つなら、盛り上がりも2倍。北陸初となる自転車レースの熱気を県内全域に広げる意図だったのかもしれない。

西部隊の随行車に乗り、車列を追った。金沢、野々市の市街地を抜け、海側の白山市美川地区へ入る。道路脇の気温計表示は34度。



## 地域浮揚の 時を駆ける「大壮拳」

# カンフル剤

ピタリと縦に並んで空気を抵抗を減らす「ドラフティング」の隊列で、小学生の2人も顔をしかめて食らいつく。時速20〜25キロのペースだ。明治のレースはというと、道路は未舗装、乗り手は素人。さぞスローな展開に…と思いきや、東西両コースの1着は平均時速で約23〜24キロ出している。調べると、同年の「第4回ツール・ド・フランス」の優勝者が平均時速で約24.5キロだから、大健闘だ。大会前、本紙はロードレース先進地である欧米の大会記録を事細かに紹介している。一過性のイベントに終わらせず、スポーツ文化として定着させるという狙いが明白なのだ。

なぜこのタイミングでロードレースなる新文化を地方から発信し



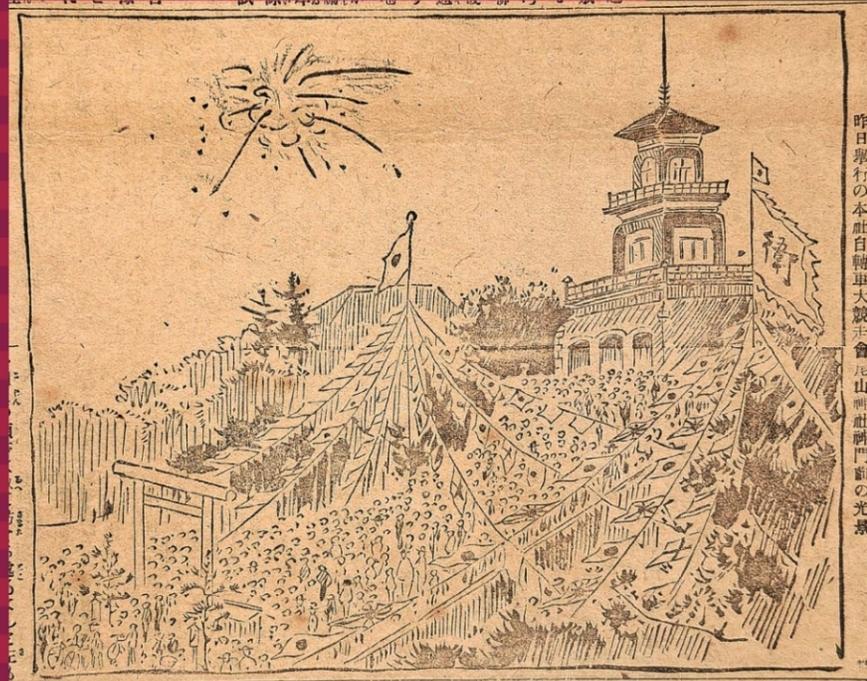
## ツール・ド・のとを全国区に

よつとしたのか。本康宏史金沢星稜大特任教授は、前年に終結した日露戦争と絡めてこう推察する。

「賠償金を得られなかった日本は戦後不況に陥ります。特に金沢は第九師団に経済を支えられていた軍都だっただけに打撃は大きかった。そんな沈滞ムードを吹き飛ばし、スポーツの面でも欧米と肩を並べるんだという強い思いが、異例のレースを企画した背景にあるのではないだろうか」

その理念は時を経て受け継がれた。能登半島の振興を目的に、本紙が1989年から手掛ける「ツール・ド・の」と400だ。景観美と起伏に富む半島ならではのルートは、35回目を迎えてもなお、全国から愛好者呼び込みめる潜在力をまだまだ秘めているはずだ。

思えば、終戦直後に本紙が主催した「現代美術展」もまた、逆境をばねにした「未曾有の壮拳」だった。社会が活力を失っている時こそ、破天荒な発想を形にし、カンフル剤として地域に打ち込む。奥能登地震や大雨被害が起きたタイミングで、明治の「復興レース」が再現されたのも何かの巡り合わせだろう。117年前の「わだち」をなぞり、地元紙の使命をあらためてかみしめている。



昨日発行の本紙自転車大競走会尾山神社神門前の光景

- 東西両コースのゴールを目指してスタートする参加者  
＝29日午前6時50分、金沢市の尾山神社神門前
- 1906（明治39）年10月15日付の紙面に載った尾山神社神門前のイラスト。スタート時の大にぎわいを伝えている

**130** 北國新聞 創刊130年